

《編集後記》

「**Métier vol.9**」の編集を終え、無事に発行ができ、ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

今回の編集に当たっては、従来の紀要の伝統を踏まえながらも、本校の教育活動の歩みが年度ごとに蓄積されるとともに、紀要という形で残り、引き継がれていくことを祈念しております。

このような意味でも、様々な視点で執筆されたものを、一編でも多く残すことが、本校のますますの発展の一助となると考えております。

こうした趣旨のもとで、多くの教職員に寄稿を依頼し、執筆いただき、発行に至りました。

個人的な雑感を書かせていただきます。

平成31年度（令和元年度）の茨城県教育指導方針「巻頭のことば」に、教育長（柴原宏一氏）が、「一人一人が輝く活力ある学校づくりを目指して」のもと、寄稿しております。

時代の変化に対応し、自ら考え、自ら行動し、解決できるような「人財」の育成に向けて、様々な施策を展開していることを記し、生徒の目指す姿を、グローバル社会で活躍する「人財」を育成するとしています。あえて「人財」という文言を使っていると捉えております。

ビジネスにおいては、「じんざい」という言葉に、四つの漢字を当て、意味を持たせています。

「人財」は、実績があり、かつ、更なる成長が期待できる人

「人材」は、実績はないが、成長していくことを期待されている一般的な人

「人在」は、実績は残せているが、それ以上の期待が持てない人

「人罪」は、実績を作れず、成長も期待できないような人

教育の現場において、生徒一人一人が「人財」となれるような教育を実践し、社会へ送り出すという使命があるという認識を、教職員一人一人が持つことが大切であると考えます。

戦国武将の武田信玄の言葉「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」が、あります。「人は石垣、人は城」と、使われていることもあるようですが、どちらにしても「どれだけ堅固な城でも、人を蔑ろにしたら滅びる。」という意味で用いられており、「城」を「組織」と考えれば「組織は、人によって作られ、人に支えられている。」と解釈することもできます。あまりにも飛躍的な考え方になるかもしれませんが、人、すなわち、教職員自身が「人財」であり続けることこそが、教育の目指す姿であり、学校という「組織」のあるべき姿ではないかと考えます。

今年度の流行語年間大賞となった「ONE TEAM」。

中央高校が「ONE TEAM」であり、今後も「ONE TEAM」での教育活動が営まれ続けることを信じ、教育活動の振り返りと今後の展望を記した「**Métier vol.9**」が、今後の指針の一助となることを祈念いたしております。

最後に、「**Métier vol.9**」に執筆いただいた教職員各位に、日ごろの研鑽に敬意を表しますとともに、読者、関係者の皆様から引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

（編集担当：教頭 広戸 純）